

予防接種のしおり ～ 接種前に必ずお読みください ～

接種を受けることができない人

体調の良い日に受けましょう！

- 1 明らかに発熱している人(通常37.5℃以上の場合)
- 2 重い急性疾患にかかっている人
- 3 子宮頸がん予防ワクチンの成分(詳しくは医師にお尋ねください。)によってアナフィラキシー(通常接種後30分以内に起こる重いアレルギー反応のこと)を起こしたことがある人
- 4 麻しん・風しんなどの生ワクチンの接種を受けて27日以上、インフルエンザなどの不活化ワクチンの接種を受けて6日以上の間隔をおいていない人
- 5 その他、医師が不適当な状態と判断した場合

接種後の注意

- 1 接種した後に注射した部分が腫れたり痛むことがあります。
- 2 注射した部分の痛みや腫れは、体内でウイルス感染に対して防御する仕組みが働くために起こります。通常は数日間程度で治ります。
- 3 接種後に、重いアレルギー症状を起こすことがあるので、接種後はすぐに帰宅せず、少なくとも30分間は安静にしてください。
- 4 接種後は、接種部位を軽くおさえ、揉まないようにしてください。
- 5 接種部位は清潔に保ちましょう。接種後当日の入浴は問題ありません。
- 6 接種後丸1日は、過度な運動は控えましょう。
- 7 接種後1週間は症状に注意し、強い痛みがある場合や痛みが長く続いている場合など、気になる症状があるときは医師にご相談ください。

他のワクチンとの接種間隔

子宮頸がん予防ワクチンは不活化ワクチンです。麻しん・風しんなどの他のワクチン接種を受ける場合は、6日以上間隔をおいて接種を受けてください。

子宮頸がん予防ワクチンの主な副反応

	2価(サーバリックス®)	4価(ガーダシル®)
頻度 10%以上	かゆみ、注射部分の痛み・赤み・腫れ、胃腸症状(吐き気、嘔吐、下痢、腹痛など)、筋肉の痛み、関節の痛み、頭痛、疲労	注射部分の痛み・赤み・腫れ
頻度 1～ 10%未満	発疹、じんましん、注射部分のしこり、めまい、発熱、上気道感染	発熱、注射部分のかゆみ・出血・不快感、頭痛
頻度 1%未満	注射部分のピリピリ感、ムズムズ感	注射部分のしこり、手足の痛み、筋肉が硬くなる、下痢、腹痛、白血球数増加
頻度 不明	失神、血管迷走神経発作(息苦しい、息切れ、動悸、気を失うなど)	無力症、寒気、疲労、倦怠感、血腫、失神、浮動性めまい、関節痛、筋肉痛、おう吐、吐き気、リンパ節症、蜂巣炎
重い 副反応	まれに、アナフィラキシー様症状(血管浮腫、じんましん、呼吸困難など)	まれに、アナフィラキシー反応などの過敏症反応、ギラン・バレー症候群、血小板減少性紫斑病、急性散在性脳脊髄炎など

医薬品医療機器総合機構法に基づく救済制度について

子宮頸がん予防ワクチンを適正に使用したにもかかわらず発生した副反応などにより、入院が必要な程度の疾病や障害などが生じた場合は、医薬品医療機器総合機構法に基づく被害救済の対象となります。健康被害の内容、程度に応じて、薬事・食品衛生審議会での審議を経た後、医療費、医療手当、障害年金、遺族年金、遺族一時金などが支給されます。気になる症状が発生した場合には、医師にご相談ください。

◆子宮頸がんとは...

子宮頸がんは子宮の入口にできるがんです。日本では、1年間に約15,000人の女性が子宮頸がんにかかり、約3,500人が死亡しているといわれています。最近では、特に、20～30代の若い女性で子宮頸がんにかかる人が急増しています。子宮頸がんは、発がん性ヒトパピローマウイルス(HPV)に感染することにかかる病気だといわれています。発がん性HPVは、特別な人だけが感染するのではなく、誰でも感染するありふれたウイルスです。また、感染したからといって必ずがんになるわけではなく、子宮頸がんになるのは感染した人のうち1%未満であると考えられています。発がん性HPVのうち、子宮頸がんから多く見つかるタイプはHPV16型と18型といわれています。

◆子宮頸がん予防ワクチン

子宮頸がん予防ワクチンは、HPV16型と18型の発がん性HPVの感染を防ぐことができるワクチンで、2価(16, 18型)の「サーバリックス®」と4価(6, 11, 16, 18型)の「ガーダシル®」があります。ただし、その他の発がん性HPVの感染は予防できませんし、すでに感染しているウイルスを排除したり、がんになるのを遅らせたり、子宮頸がんを治療する効果はありません。

子宮頸がんはワクチンの接種と定期的な検診で予防しましょう！

ワクチンで防ぎきれなかった病変を早く見つけて治療するためには、子宮頸がん検診が必要です。子宮頸がんは、がんになるまでに時間がかかるため、早く見つければ、がんになる前に治療することができます。